

令和元年度 第2回向日市いじめ防止対策推進委員会

- 1 日 時 令和2年2月18日(火)午後1時から同3時まで
- 2 場 所 乙訓総合庁舎1階 第2会議室
- 3 出席者 本間委員長(大学教授)、北口委員(臨床心理士)、荒井委員(臨床心理士)
- 4 内 容

(1) 令和2年度いじめ調査の結果の概要について(資料を基に説明)

①1回目と2回目のいじめ調査の結果

- ・認知件数 小学校678件と598件、中学校81件と87件、小中合計年間1444件
- ・未解消件数 小学校 57件と585件、中学校27件と75件、小中合計年間 744件
- ・解消件数 小学校621件と 13件、中学校54件と12件、小中合計年間 700件

②要指導の内容

- ・1回目の小学校7件は、2回目も加害児童が、同じであるものの、被害児童が変わっており、加害児童への指導が継続している。
- ・2回目の中学校1件は、事象としては、なくなっているが、継続指導中のものである。

③学年別認知件数の傾向

- ・全体で減少しており、特に小学校1年生、5年生、中学校1年生で、他学年と比べて減少している。(ただし、昨年度の中学校1年生は、特に多く、比較対象としては考慮する)

⑤認知されたいじめの態様

- ・小学校中学校ともに、3つの態様「冷やかしやからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」、「仲間はずれ、集団による無視」が、いじめの態様の中で多くを占めている。
- ・その他が昨年より、減少しているのは、内容一つ一つを見直し、態様別に集計している。

(2) 助言等

- ・認知件数は、増加していないが、数の増減で、いじめが増えた、減ったと判断しない。
- ・文部科学省の問題行動調査の中で、不登校や暴力事象は、件数そのものが事象の数として、発生の増減を表すが、他方いじめの認知件数は異質で、その数が、いじめが蔓延しているとか、少ないといった判断にはならない。
- ・いじめと捉える感度を下げないためにも、アンケートや面談を実施するものであり、認知件数が増加しても、減少しても、いじめに対する危機感をもたなければならない。
- ・特に小学校については、低学年の認知件数は、担任の意識の表れと思っていい。
- ・数値を統計的に見ていくと、数値の変化を見ることに意識が行き、経年比較から変化があまり見えないと、いじめを認知する重要さやいじめと感度の高きことの大切さに対する意識が薄れ、そのことが危機感の弱さにつながると考えている。経年比較し、状況が変わってなくても、普通だと思わないでほしい。
- ・これまでの、繰り返しの歴史の中で、正常化バイアスがうまれて、危機感が薄れて、大事件が起こらないとも限らない。
- ・常に言っているが、危機感を持たせるためにも、教育委員会が、学校への指導を続けることが大切であり、いじめ防止に対するメッセージを送り続ける。